

## 古代オリンピックの最大行事 百頭の雄牛をゼウスに

十一月二十五日という日は、近代オリンピックにとって忘れられない日である。クーベルタン男爵は、ナポレオンの没落以後、フランスの若者が意気消沈しているのを嘆き、何とか奮い立たせようとした。それにはスポーツによるのが一番と考え、古代オリンピックを復活させようとしたのである。

一八九二年十一月二十五日、ソルボンヌで開催されたフランス・スポーツ競技連盟の創立五周年記念講演会において、彼は「オリンピック・ルネッサンス」と題した講演を行い、初めてオリンピック競技の復興を公にした。

しかし、聴衆の反応は思わしくなかった。彼は、屈することなく運動を続け、イギリスの国際競技連盟役員のハーバートやアメリカ・プリンストン大学教授のスローンらの賛同を得て、国際オリンピック委員会の設立にこぎつけた。一八九六年に、アテネで第一回のオリンピックを開催することを決めたのは、九四年六月二十三日のことであった。

すべては、この十一月二十五日の講演から始まったのである。



モデルとなった古代オリンピックとはどんな大会だったのだろうか。詩人・ピンダロスによれば、ヘラクレスが、十二の難事のエリス（ギリシャ西部）のアウゲイアス王の牛小屋の

掃除が成就したことを祝い、ゼウスを称（た）えたことから始まったというが、あくまでも伝説である。四年に一回、五日間にわたって競走、レスリング、ボクシング、戦車レース、五種競技などが行われた。祭りの真ん中の日が、夏至のあとの第二か第三の満月の日にあたるように定められていたから、八月の半ばから九月の半ばという暑い日に行われていたのである。

大会三日目の朝に、エリス人が提供した百頭の雄牛を殺し、その脚をゼウスのために焼いて供えた。ゼウスは、その煙から栄養をとると信じられていたのだ。祭りに参加した人々は、残りの牛の肉を焼いて共に食べ合い、神を称えたのである。